

金沢八景・野島のアマモ場にすむ魚たち

Fish fauna of *Zostera* bed in Nojima (Kanazawa-hakkei), Tokyo Bay

工藤 孝浩 (海をつくる会)

Takahiro Kudo (The Sea Beautification Society)

Kudo.5k3s@pref.kanagawa.jp

演者は横浜市金沢八景沿岸域において、大学生だった1984年から現在に至るまで35年間にわたって主に魚類の潜水観察調査を続けている。周辺で埋立てが進む中、その間には人工海浜(海の公園)や人工島(八景島)が造成されて自然海岸は延長500mの野島海岸を残すのみとなり、かつて豊かだったアマモ場は1990年代半ばには消滅寸前となった。

海をつくる会は、2001年に野島海岸のアマモ場再生に立ち上がり、以降は神奈川県・横浜市・国土交通省等からの支援を受けつつ地元漁協や学校など多様なセクターと連携して再生活動に取り組んできた。金沢八景の再生アマモ場は2005年頃から急速かつ自律的に拡大し、潜水観察では新顔の生物の発見が相次ぐとともにアオリイカ等の産卵も確認された。

2006年3月からは、神奈川県水産技術センターが野島の再生アマモ場で大きな網を人力で引く「ひき網」調査を始め、予算とマンパワーの限界から定期的・継続的な実施が難しかったこの調査を海をつくる会がサポートした。その結果、2018年3月まで調査は時化の日も雪の日も毎月欠かすことなく続けられ、13年間で計158回分ものデータを蓄積することができた。この調査では、魚類だけでも実に12目56科154種(未同定種を含む)、合計171,974個体が記録されたのである。これは、県と市民団体との協働によって実現した定期的・定量的・継続的かつ長期的な魚類相モニタリングであり、全国的にみても稀有で先進性を有する事例と言えよう。この調査によって得られた良質なデータからは、近年の東京湾に現れつつある温暖化や外洋水の影響拡大などの長期的な魚類相の変化傾向を読み取ることができるなど、極めて興味深く学術的な価値も高いものである。

本講演では、再生されたアマモ場にすむ魚たちの顔ぶれとその変化を紹介するとともに、市民団体と公的機関との協働のあり方や持続的な自然再生・体験活動の実践方法等についても言及したい。

キーワード：再生アマモ場，協働，魚類相，モニタリング，金沢八景・野島